

〔翻刻〕 徒然種講筵要集

—— 享保の古典講釈マニユアル ——

川 平 敏 文

はじめに

和漢の別を問わず、世に古典の注釈書と言われるものは数多い。それらには普通、その古典の中で使用されている語句の意味や、引用されている詩歌の典拠といった、その古典の内容に関する学説が述べられている。しかし、そのような内容そのものではなく、その古典をどのように講釈すればよいかという教授法が記されたものとなると、その数はとたんに減るのであろう。かような趣旨の書物が全体どれくらい残っているのか分からないが、少なくとも徒然草にはそれがある。

京都大学文学部蔵『徒然草大意読方秘伝抄』（写本一冊、元禄十五年奥書）がその一つで、本書には徒然草本文の朗読方法、先人の説の捌きかたから始めて、聴衆の年齢・身分・性格にあわせて、どのような章段を選び、どのように講釈すべきかといった内容が事細かに記されている。そしてこのような技法が『徒然草大意読方秘伝抄』の編者に特有の

ものではなかったことは、本稿で紹介する松井屋酒造資料館蔵『徒然種講筵要集』（写本一冊、享保十三年跋）の存在によって証明される。本書にもまた、上記のような講釈法に関する細かい注意が述べられているのであって、元禄・享保という時期に、「平家語り」や「太平記読み」と同様に、徒然草講釈という営みが一つの技法のレベルにまで到達していたことが窺えるのである。

その意味でこれら二つの文献は、徒然草受容史という観点のみならず、芸能史的な観点からも興味深い資料だと言えるのであるが、前者についてはすでに一応の考察を加えたものの、後者についてはいまだ十分な紹介ができていない。そこで本稿では後者について、その文学史的意義を述べ、あわせてその内容を紹介したいと思う。

一 書誌および著者・序跋者

○所蔵者 松井屋酒造資料館（岐阜県加茂郡富加町）。

○書型 大本。縦二七・八糎×横一八・九糎。

○巻冊 一卷一冊。

○刊写 写本。

○題簽 「徒然種講筵要集」（原裝。左肩貼付。無粹）。

○扉 「徒然種講筵要集」。

○序 「講筵要集序」。末尾「享保十三戊申三月芙蓉臥隱書」。

「講筵要集之序」。末尾「洛西之桑門釣古子拜書」。

○内題 「徒然種講筵要集」。

○丁数 全二二六丁。

○識語 「右鈔の意趣并懷旧詞」の末尾に、「享保十三申孟春吉日 濃州不破中山禁 / 春雷堂迂菴謹而述之」。

○跋 「元文元年辰の仲夏日 / 乘陽齋平井冬音」。

まずはここで、識語の筆者で本書の著者でもある「春雷堂迂菴」について触れておこう。迂菴については、本書および松井屋酒造資料館、そして富加町郷土資料館所蔵の諸資料のほかは、現在掘るべきところを知らない。今それらを参考に彼の伝をまとめれば以下のごとくである。

迂菴、姓は安田氏。美濃国不破郡荒川（現在の岐阜県大垣市荒川か）の住。春雷堂・以中・此君などと号した。富加町郷土資料館蔵「松葉集」の宝暦二年奥書に「八十三歳」

とすることから逆算すれば、寛文十年の生まれになる。没年も未詳であるが、同館蔵「以中狂歌二首」詞書に「八十八歳」の文字が見えるので、少なくとも宝暦七年までは生存が確認される。壮年時、京都妙心寺の塔頭で仏道修行をする傍ら、松永貞徳の高弟・宮川松堅のもとで徒然草および和歌を学んだという（その事情については次節を参照）。また本書第二三九段の註によれば、堂上方にも出入りしていたようである。

漢文序の筆者「芙蓉臥隱」、和文序の筆者「洛西之桑門釣古子」はともに不明。

跋文の筆者・平井冬音は、美濃国加治田で酒造業を営んだ名家平井家の八代目。乘陽齋・秋扇堂などと号した。元文二年正月十八日没、四十四歳。香川宣阿・水田長隣・有賀長伯など京住の名だたる地下歌人に和歌の通信添削を受け、地元的好士らとともに極めて質の高い文事サークルを形成していたことは、神作研一氏らの研究に詳しい（註2参照）。

さてこの跋文によれば、迂菴は享保十三年、「徒然草三ヶの大事」とともに、本書ならびに「師伝抄」を自ら染筆して冬音に授けたのだという。「師伝抄」とは、本書とともに松井屋酒造資料館に伝来する「徒然草師伝抄」（写本四冊存）を指す。こちらは迂菴が、師である宮川松堅の説を

中心に諸説を書き留めたもので、いわば一般的な徒然草注釈書の形態をとる。とはいえその内容には注意すべき点多く、別稿で改めて紹介することにする。

ちなみに冬音はこの跋文を記した翌年に亡くなっているが、迂菴と平井家との関係は、冬音の跡を継いだ九代冬秀にまで及んでいることが、富加町郷土資料館蔵の諸資料から窺える。またこの冬秀が師事したと見られる京都の地下歌人松浦寛舟は、宮川松堅三世を名乗るが（同館蔵『五儀之秘伝』奥書）、あるいはこれも迂菴を介した繋がりであったかもしれない。

二 安田迂菴と宮川松堅

迂菴がこの書を編述するに至った経緯については、本書末尾の「右鈔の意趣并懐旧詞」が参考になる。彼の伝記を補うところもあるので、以下にやや詳しく見ておこう。

迂菴は「美濃の御山」すなわち現在の岐阜県南宮山の村に生まれたという。「武蔵野の草の葉しげかりける勤」に明け暮れる日々であったとあるので、大垣藩に仕える江戸詰めの武士でもあったろうか。宝永二年、三十七、八歳の頃、母が病の床についたのを機に帰郷し、医師である兄のもとでしばらくは医学を勉強した。兄は京都の「味岡氏」（正

徳三年刊『良医名鑑』に「医学講説家」として登録される味岡三伯のことであろう）の門弟であったという。

しかしその母も享保二年正月のはじめに亡くなったので、その年の秋頃、昔より縁故があった臨濟宗の大刹・京都正法山妙心寺内のある塔頭に入り、仏道精進の生活が始まる。迂菴は二十歳の頃から徒然草に心酔し、ほとんど暗誦できるほどであったが、このことをその塔頭の住職であった什大禪師が嘉して、「風雅の旧知音」である宮川道柯居士（松堅）を紹介してくれることになった。徒然草は「貞徳家の書」であり、松堅はその貞徳の「高門」だったというのがその理由である。それから迂菴と松堅との交流が始まる。

このとき迂菴四十七歳、松堅八十五歳、什大禪師九十歳。松堅はすでに高齢を理由に人との交わりもほとんど絶っていたが、禪師との誼みで迂菴を快く迎え入れてくれた。以後、迂菴は月ごと日ごとに松堅のもとに通い、「本書（徒然草）の奥儀をも残なく請継」ぎ、享保三年七月二十五日、ついに「一卷の書」を授けられたという。これは貞徳流の徒然草伝授を印可されたことを指すものであろう。

あるとき歌物語のついでに松堅が次のように言った。徒然草については、迂菴に長年にわたる考究の蓄積があったゆえ、奥義の伝授も容易に行ったが、やはり和歌を詠めて

こそこの書の神髄にも触れることができるはずだ、と。そこで迂菴は松堅からその高弟の内海顕胤を紹介され、松堅門の月次歌会にも出席するようになった。

その後いつのころか、迂菴は故郷に帰り、人の求めに応じて徒然草の講釈を行うことが多くなつた。そしてここ十年來の徒然草に関する考説を一書にまとめて松堅に見てもらつたところ、松堅から次のようにたしなめられた。「予、むかしより此書をよむ事數百べん、終に抄を作らず」。その理由は、徒然草の注釈書はすでに先人の註で事足りており、結局あとは己れの知見をひけらかすための議論に終始するしかないからである。自分が若かつたとき、高辻亜相卿のところへ参上して、ある老僧と本書についていささか議論したことがある。そのことさえも、本書の奥義に反したことであると、徒然草を講ずるたびごとに後悔したものである。「必、抄作る事なかれ。書なきにはしかず」。徒然草を一段なりとも自ら理解し、それを他人に示すことこそが、本書に対する「信」である——。それが松堅の教えであつた。

迂菴はこの言葉に慄然として、自らの抄をことごとく反故とした。そこでその後、人のため、身のためになる部分のみ五、六箇所を書抜いて再び松堅に見せると、松堅は破顔微笑して、「是こそひとへに利口を離れ、為人專にして、

末々此草紙の軽からざる事を世人知らんか」と述べたといふ。松堅の考える徒然草注釈、あるいは講釈の意義なるものは、かくのごとく教訓的なものであつたことが分かるが、それについては後述する。

ともあれ、迂菴は松堅とのこのような交流の中で、徒然草に対する己れの立ち位置を模索していったわけであるが、自分の講釈を所望する人々の求めに應ずるまま、写し与えたのがこの抄であるという。

以上が「右鈔の意趣并懐旧詞」の大概である。この文章は迂菴が師・松堅との交流をやや感傷的に回想して綴つたものであるが、ここには徒然草注釈史を考える上で注意すべき情報が二点ほど含まれている。

その一つは、貞徳の遺跡柿園を継ぎ、当時京都地下歌壇に一勢力をもつた宮川松堅が、徒然草に対して一家言を有していたということ。松堅はこれといった徒然草注釈を残していないので、これまで注釈史の中でほとんど注意されなかつた人物であつたが、この文章の出現によつて、彼は徒然草を熟読玩味しながらも、あえて注釈書を残そうとしなかつたのだということが分かる。ではなぜ松堅はこのような姿勢をとつたのだろうか。

彼の師・松永貞徳には、「慰草」（慶安五年跋・刊）と称する徒然草注釈書が残っている。本書は、その注釈部分は

基本的に先行説、具体的には『鉄植』（慶安元年刊）をほぼ丸取りしたものであるが、そのかわり一章段ごとに「大意」と呼ばれる貞徳の評言が附載されていて、その点が大特色となつてゐる。その内容は、各章段で兼好が真に言わんとしていることは何かを、和漢の故事や自らの経験談に引きつけながら解説したもので、教訓的色彩を強く帯びているのが特徴である。

貞徳の自跋によれば、この「大意」は、彼がむかし大衆に向かつて徒然草講釈をした際の覚書がもとなつてゐるという。そして、例えば第九九段で「其比も此草紙、世にもてはやししながら、此大意をよみきかするよみて（＝読み手）なかりしゆへにて侍るこそ、口惜しき事なれ」などと言つてゐることからも分かるように、彼はこの「大意」の講釈を、徒然草を世に（発信）する際の非常に有効な手段として認識していた。

ここでいま一度、松堅の言を振り返つてみよう。松堅は、己れの知識や見解をひけらかすような徒然草注釈はもはや必要ではなく、いわば徒然草の道徳的価値を人に伝えることこそが大事なのだと説いてゐた。これはまさしく貞徳の姿勢や方法と相通するものである。貞徳の弟子としては他に加藤警斎や北村季吟に、それぞれ学術性の高い徒然草注釈が残つてゐるが、徒然草の「心」を伝えることに徹した

という点を見れば、松堅こそが貞徳の姿勢や方法を最も正統的に受け継いだ人であつたということになる。『徒然草講筵要集』という、徒然草講釈の技法を記した書が松堅の門下から生まれたのは、単なる偶然ではなかつたのである。

『石鈔の意趣并懐旧詞』の中で注意すべきもう一点は、この文章の末尾に、松堅の四十九日の法要に参列した人々の名前が挙がつており、そこに「閑寿」という人物の名前が見出されることである。閑寿は、私見によれば江戸時代における徒然草注釈書の中では最も優れていると思われる『徒然草集説』（元禄十四年刊）の編者で、ほかに『兼好諸国物語』（宝永三年刊）というやや通俗的な兼好伝記の著述もある人。この人物の伝については、万葉学者木瀬三之の弟子であること、鹿ヶ谷法然院を中心とした和歌文藝圈にあつたことなどを拙稿においてすでに明らかにしたが、ここで新たに宮川松堅との関連も浮かび上がったことになる。三之との親密な交流は松堅にも見られるものであるから、この三之が二人の接点になつてゐたのかもしれない。ちなみに本書の中にも三之の徒然草に関する言説が記載されているが（第一段、第一七二段）、彼は当時博学として知られていながら、自身纏まつた著述を残さなかつた人である。よつてその学問は断片的にしか窺うことができないから、その意味でも本書は貴重な情報を記録してくれた

と言える。

三 内容上の特色

本書が普通の注釈書と違う点は、前述のように、講釈の要諦を記しているということである。特に巻末の「講筵可心得次第」にそれが簡条書きでまとめられているので、要点のみを紹介しよう。

一、講釈の回数は、発起人の器（教養・身分など）に応じて按配すること。「講談一片に寛、判形のごとくするは、初心の至也」。

一、貴人から望まれた場合に講すべきは、しかじかの段。

一、二回の読み切りとし、無常の段、禁忌の段などは避けること。「本文、註の通り明かに可_レ講」。

一、三ヶの大事、そのほか秘説の含まれる段は、望まれても決して講じないこと。

一、僧侶から望まれた場合に講すべきは、しかじかの段。一回切り、夜講釈などの時は声の大きさや話の長さに注意すること。「一座切の座敷講談はむつかしき物也」。

一、婦女子から望まれた場合に講すべきは、しかじかの段。短く切り上げるように心懸けること。「あまりけややく色めきたる段、又いま_レしき段、遠慮すべし」。

一、総じて本文も註もすべて暗記するほどに読み込んでおかねば、よい講釈はできない。「僕が一年、道柯居士（_ニ松堅）に伊勢物語をあそここ、聴侍るに、是も多くは空にて申されける。居士、時は八十五歳也」。

すなわちここには、講釈の実施回数、聴衆の身分や性別に応じた章段の選択例、講釈の際の心構えなどが書かれている。例えば貴人への講釈の注意のところで、むかし松永貞徳が九条家において徒然草を講釈した際、「おとろへたるすゑの代といへど」と原文にあるところを、「おとろへぬすゑの代」とわざと言ひ換えて読んだという逸話が盛り込まれているが、これなどは通常の注釈書などからは決して窺い知れない、当時の古典講釈における機微を垣間見せてくれる貴重な証言であろう。

次に、各章段を講釈する上での具体的な注意をいくつか紹介する。

まずは有名な序段。徒然草の講釈においてはこの序段が特別に大切だという。「先づ能本文を諳、次諸抄の註作と師伝と自見と細かに了簡し、心中能吞み込み、心を高きにをき并じ出すべし」。次に本文の素読みについて注意をする。儒書や詩文などは時折は素読みの練習をするものだが、仮名の類は読み易いのでついそれを怠り、かえって読み損なう場合が多い。「此草紙の外、源氏物語、伊勢物語など

は別てよみ方有。師伝なくして笑草となるべし。軽々しくおもふべからず」。本文の朗読方法に細かい読み分けがあったことについては、先に紹介した『徒然草大意読方秘伝抄』の考察(註一)においてもやや詳しく弁じたので、そちらを参照して頂きたい。

また第一三段、「ひとり燈のもとに文ひろげて」の段には、兼好一生の楽しみが籠もっているという。この段はけっこう長いものではないが、その文章は興趣に満ち、よくまとまっているから、「講席の時、何程も長く、舌弁おもしろく講ずべし。聴人氣を付、心をよする段也」。短い章段であり、当時の注釈書もさほど力を入れて解説していないように見受けられるが、本書はこの章段を意外に重要視している。講釈向きの章段というのも確かにあったであろう。

あるいは第一三七段、「花は盛に、月はくまなきをのみ見るものかは」の段は、古来その文章が称美されている段であるが、この段は一見風流を述べているようで、実は無常を観じたものであるという。「講筵の時いかにも安らかに情をこめ、はたたのもしく、果ては常なきことほりをいとしみくと、みづからも泪を浮べ、人をもなかせ申べき段也。講師よく心得べし」。真宗の説教では、感極まった聴衆が講師に向かって手を合わせ、念仏を唱えはじめるといふ。この段は、そういった深い感動を与えることができ

るかどうかが、講師の腕の見せどころであったようである。最後にもう一例。第三段、「よろづにいみじくとも、色好まざらん男は」の段は、恋愛論を述べた段として有名である。当時の注釈書は、概ねこの段を教訓的に解釈するが、本書もまたその姿勢を同じうする。すなわちこの段は好色に寄り添いながら人を惹きつけ、結局は人の道を述べたものだといひ、また講師はそこを上手く弁じ出さねば、この段を講釈した意味がないというのである。かかる教訓的解釈が単に注釈書の上だけの建前論ではなく、講釈という場でも実際に行われていたことが確認されて興味深い。

次のような逸話が記されている。——京都四条のある寺院でこの段を読む者がいたので、ふと立ち寄って聴いたところ、「一向艶文の事のみにて、本道の事は曾てさたなかりし」。連れの者も「この道」(徒然草)の達人であったが、兼好もこの講談を聴けばさぞかしおかしお思いだらうと、二人して笑いながら帰ったと。ここには教訓を疑う余地が微塵も見られない。

その他、本書には、「志水」なる人物が京都双ヶ丘に兼好墓碑を建設しようとして、宮川松堅の縁者で儒学者であった宮川道達に銘の執筆を依頼していたこと(本書冒頭の兼好伝)、松堅が冷泉家や高辻家など堂上方に出入りしていたらしきこと(第一〇〇段、「右鈔の意趣并懐旧詞」、

徒然草伝授は「世人教誡の元にも成べき事なればとて」、中院通勝と烏丸光広が貞徳に授けたのが事の起りだとしていること（第二二一段）、など興味深い記事が見出せることも付記しておく。

翻字編

凡例

一、漢字の旧字体・異体字などは現在通行の字体に改めた。

一、仮名には適宜濁点・半濁点を付した。また、送り仮名として書かれた片仮名の傍訓などは適宜平仮名に改め、本文に組み入れた。

一、改行や字下げなどはなるべく原本の体裁を残すように努めた。但し説解の便を図って、適宜段落を設けたところもある。

一、章段番号は原本の表記を基とし、現行のものと異なる場合は（ ）内に現行の番号を示した。

一、引用などのある箇所は適宜「」を付した。

一、誤字・脱字、あるいは字義不明と思われる箇所には、右側に（ママ）を付した。

一、虫損は□とし、右側に（虫損）と記した。

一、割注は（ ）で示した。

一、その他の翻刻者注は（ ）内に記した。

註

1 拙稿「徒然草講釈考—元禄期の指南書から—」（『近世文藝』第八〇号、平成十六年七月）、同「翻刻」徒然草大意説方秘伝抄—元禄の古典講釈マニユアル—」（『文献探究』第四二号、平成十六年三月）

2 神作研「元禄の添削」（『近世文藝』第八一号、平成十七年一月）、加治田文藝研究会編『美濃加治田平井家文藝資料分類目録』（平成十七年三月）、同『往来松詩歌』（富加町文化財調査報告書第二六号、平成十八年三月）、同『花開く加治田の文芸（展示リーフレット）』（平成十八年十一月）

3 拙稿「鬼舟子閑寿は青木鷲水に非ず—和学者覚書—」（『雅俗』第六号、平成十一年一月）

4 拙著『兼好法師の虚像』（平凡社選書、平成十八年）二五六頁に紹介した。その際、道達を松堅の弟と断じてしまったが、甥であるとする資料も存在するので注意しておきたい。川平敏文・

勝又基「翻刻『諸説録』—元禄和学の諸相—」（『近世初期文芸』

第一八号、平成十三年十二月）一五五頁参照。

講筵要集序

迂菴叟者余之方外交也。為人好古且嗜風雅而汲言泉乎富緒河之流、掇詞葉乎淺香山之陰矣。最旣徒然草而漱其芳潤者、多年特作之鈔解、持之以呈洛之道柯翁。々一覽許可。則名之曰講筵要集。蓋欲使初學易通曉也焉爾。先輩選々注之積之者無慮數十家、各提要探蹟也。間又徇私媒利而有害辭意者也。要集則不然也。叟之介与兼師讐而其行踪亦有与兼師相肖者也。是則千載之下親見兼師之羔雉而有恭敬之實者乎哉。享保十三年戊申春三月芙蓉臥隱書。 (訓点ハ底本ノママ)

講筵要集之序

源氏物語は卷数多、書中ことごとく見うるにかたしといふは、諸人の力たらざれにや。伊物も亦つゞきて、世つかず浅き学士の見るがうちに懈る。此徒然種は賢愚をわかつたず、ちかくして見安かるが内に、詞の外にかぎりなき余情をあらはし、かつは人々教誡のはしともなれる

事、古人も是をあげ用、和論語など云名をも呼び侍るなる。爰に西濃中山の禁に独の隠士あり。若かりし時より老よする浪の間に、此草紙を見る事、年、愚なるがごとし。家に一抄あり。徒然種講筵要集と名づく。玉より玉を研き、金よりこがねを撰出すのたぐひにや。真名序あり、仮名序におよばずなれども、作者と予が風雅の旧知因なれば、序作れと云にいなびがたく、序とやせん。ことほりとやいはん、書するにおかし。洛西之桑門釣古子拝書す

徒然種講筵要集

夫れ兼好法師は鎌足公より十九世之孫、吉田兼延に十代也。兼延詠歌、

西之海アハキカ波羅之浪間与利阿羅波連出住吉之神

右京大夫兼名之孫兼頭の子也。姓は卜部也。此卜部家の事は往昔仲哀天皇、雷の大連に始て卜部の姓を給う。又欽明天皇御宇に常盤の大連に中臣の姓を給う。又天知御時、鎌足公に藤原の姓を給う。鎌足公より五世日良丸に到りて再卜部の姓を給うて、代々今之吉田に相続す。委系図は寿命院鈔并に野槌等に在り。兼好禁中同公の侍、官は瀧口也。世の人北面之士と云。職原抄に曰、院江参る侍を北面と云、当禁江伺候する侍を瀧口と云。兼好遁

世は人皇九十代後宇多院崩御によつて成。其時代の歌人、和漢才人也。尤二条家の門人、和歌の四天皇と称して代々の撰集に歌数あり。四天王と称する事は、沢田の頼阿、裾野の慶運、湊江の浄弁、手枕の兼好。

月やどる沢田の面にふす鴨(ツマ)の水より立つ明方の空頼阿
庵むすぶ山の裾野の夕雲雀あがるを落る声かとぞ聞

慶運

湊江の水にたてる芦の葉の夕霜さやぎ浦風ぞふく浄弁
手枕の野辺の草葉の霜枯に身はならはしの風のさむけ
き

兼好

一、葵花院の頼阿と風雅の交りをあつくする。或時頼阿に
米を乞とて履冠歌をよんで志を通ず。頼阿は青銅少をお
くりて又履冠歌をして返しをする。その歌、

よねたまへぜにもほし

兼好法師

よるもうし ねざめのかりほ

たまくらも まそでも秋に

へだてなきかぜ

返し

よねはなきぜにすこし

頼阿法師

よもすしし ねたくわがせこ はてはこず

なをざりだに きみはとひませ

一、兼好家集一卷あり。中院通村公奥書、林弘文院学士添

書有。歌員の事、不同。猶添書に委し。集の外にも人の口_{くち}に有歌多し。

兼好修学寺村、吉田或は伊賀、木曾路にすめるよし。所々に歌有。古跡求めばやと、僕一年尋あるきし所々、知れたる所、又知れざる所不同。もとめ是をだして益なき事か。

兼好の母のみまかりける法事の日申遣ける

前大納言為定

別れにし秋は程なくめぐり来て時しもあれとさぞした
ふらむ

返し

兼好法師

めぐりあふ秋こそいとかなしけれふるを見しよは遠
ざかりつ、

東妻へまかり侍しに秋はもふで来べきよし申侍しか

ば 清閑寺道我

かぎり知る命なりせばめぐりあはん秋ともせめて契り
をかまし

返し

兼好法師

行すゑの命もしれね別れこそ秋ともちぎるたのみなり
けれ

一、或説に、兼好は観応元年二月十五日に臨終、伊賀の国見山に石塔在と、近代徒然種の末書に出たり。僕一年志

ありて彼国見山へ参り、兼好の墓所を拜み侍しに〔伊勢の津より国見山迄七里、山道也〕まことに一つの塚あり。印の松一木、枝ふるひ能榮たり。塚の辺り一間ほど、おぼしき四方面の石垣あり。但し石塔は無し。草蒿寺と云禅寺一字あり。此御寺に兼好自筆の短冊あり。

一、兼好、観応元年四月八日、六十八歳にて終る。神牌は高野山に有。臨終は伊賀にて、国は同じく国分寺になきがらを納るよし正説也。国分寺も今はなし。旧跡は国見山より一里北、今の上野近所也。あさごの井と云も此近辺也。頼阿法師も此所に住めるよし、旧記に見へたり。頼阿の歌に、

いさぎよくこゝも御法の国わけて寺井に住める秋のよ
の月

兼好位牌は江州大津の北、坂本西教寺に有。又都、双の岡長泉寺に塚有り。兼好家集に、

双の岡に無常所をもふけて

兼好法師

ちぎりをく花と双の岡のべにあはれ幾世の春を過さん
此歌ありけるゆへに、後誰の人か此所に塚をもふけたる
なるべし。

元禄元年の頃、桑門志水と云人厚志ありて、此長泉寺に兼好の石碑を建んと宮川道達〔其頃京都之大儒〕此人に銘を乞う。道達書して志水に贈る。惜哉、いさ、けさ

わり有て石碑は不立。銘のうつし一卷となして今長泉寺什物也。僕が家にも持来る。

ちぎりをきし花こそあらね言の葉のくちにやしるへい
にしへの跡 志水

したひつ、我も双の岡のべにあはれむかしの花や尋ん

迂菴

一、西三条殿の御作、崑玉集に兼好の事をのせ給ふ。又、
微書記物語等にも委し。是にも用不用の事有。

一、伊賀国橘の成忠が女小弁と密通の事ありと園太曆にの
する。旧藏の園太曆には曾てなき事也。後の人、彼書に
追加して偽書するか。其外にも偽書有、異本有。甚不用、
学者心得べし。

一、いつの頃か好事者徒然種の鈔を作〔徒然草抄題ノコト也〕〔歎宜と云〕。好士
はふかく人也とて、初段より始め、終の後までを大にそ
しりをもと、したる書抄有。此作者、身の上に難義出来
て邪死す。かの板字も断絶す。又、正徳年中に徒然種明
汗稿といへる異抄出板す。とりうるに甚たらざる抄也。
此作者も短命也。

一、古来より此書の評論、諸抄の意論上げて数へがたし。
兼好は仏菩薩のごとく敬恐したる書あり。又、そしりを
もと、したる書あり。さしたる事もなきとて笑ふ書あり。
又、其中の一兩段を得てよろこぶ書あり。又、文の境に

入て手の舞、足のふむをも覚えぬ書あり。過不及は人々の心是又常なり。故人の註、信偽をとくと考、本道を弁知るべき事肝要也。

一、高師直が、塩谷判官が妻に艶書をつかはしけるに兼好頼まれ書たると云事、野槌にはしかり、深草の翁は称美あり。其外の諸抄の説まち／＼也。二百十二段の下に「人は天地の靈也。寛大にして極まらざる時は喜怒是にさはらず」。又、百五十五段に「世に随ん者は機嫌をしるべし」。此兩段を以て兼好其時を察すべし。歌に、

世の中にしたがふ人の言の葉はおもへどいはずおもはねどいふ

一、此書の題号、寿命院抄に発端の詞を以て名とす。師説にも此義を用来る。諸抄色々の説ふかくすといへども、いりほがにせんぎを加うまじき也。

一、此草紙の趣は儒釈道の三つ、此国の神の道、文は多くは源氏物語、枕双紙をうつせしと云事、諸抄の説皆一同也。先づ兼師は歌人にて、四序流行時の景氣をあはれみたるのしび、万やさしき方より発動したる物なれば、歌にこゝろあらん人、腹に味い心に甘からんものをや。

(序段)

一、つれ／＼なるまゝに、こゝろにうつり行よしなし事をそこはかとなき書つくれば、あやしうこそ物狂をしけれ

「徒然なるまゝに」と云より「物狂をしけれ」と云まで序文也。「いでや此世に生れ」と云より本文の入口也。此さかひをとくと弁じ出さねば、末々まで不都合也。講談別て心を付べし。「徒然」と云発端の詞より、都て此書中に七所に出たり。所により心の替あり。よく思慮すべし。

こゝろにうつり行

此「こゝろ」と云字義を諸抄に註を残したり。此「こゝろ」と云文字は「情」の字なるべし。心意、識の三つの差別を立るに、心は全不動の心王也。意は志也。少分別也。識は細分別情也。詠歌大概に曰、「情以新為先、詞以旧可用」。則「情」の字を用る事、子細有事也。詠歌大概抄講談之時、委述也。扱此書を講談するに、初段別て大事也。先づ能本文を誦、次諸抄の註作と師伝と自見と細かに了簡し、心中能吞み込み、心を高きにをき弁じ出すべし。儒書詩文などは真字なるゆへに、下読も折ふしはする物なれども、仮名書の類はよみ安きゆへに懈り、疎末にして読損じおし。此草紙の外、源氏物語、伊勢物語などは別てよみ方有。師伝なくして笑草となるべし。軽々しくおもふべからず。

(二段)

ありたき事はまことしき文の道

諸抄に此「まことしき」の一字、眼字也と斗有て註を
残したり。或賢者の了簡に「こ、は別に一段を上げたき
段也」と。大津三之などもさやうにもうされしと也。儒
仏神和歌の道まで此「信」の一字のみ大切の事也。世に
盗と博奕、又悪所に身を落し入る、者は人生の外狂夫也。
然ども此中にも信偽の差別は有。呪や此書をや。当時大
和尚と号し、大儒と呼ばれ我が道を説き聞かするの類も
信の有は少く、信なきは多し。此書中二百四十余段は人々
教誠の本と成る、信仁の骨肉より湧出せる物なれば、此
双紙を説き聞かする人、聴人、信を先とする事肝要也。

二段

一、いにしへの聖の御代のまつりごとをも忘れ

此段は上たる人は儉約をす、むる也。初段にて先づ人
の人品を教え、又人江相對する信をいひ出し、此二段に
て治国平天下の大綱をあかす也。殊に漢書を指し置て禁
秘抄と九条どの、遺誠を用たる所、人々心のつかぬおも
ひ寄せ、此書の新しき也。扱儉約の二字を当時心得たが
ひたり。物を略し、なすべき事をもせず、下を恵む事を
略し、先祖の祭を略す。是を儉約也と云。俗に是等を得
て勝手と云。甚だ礼にあらず。よく心得べし。(貼紙下
ニ以下ノ文字見ユ。「恭儉と云恭者は進て取る。儉者は
不為有_レ所。儉は俗に物事を入りめ引_レめと云に同じ。

先祖の祭り下を恵む事を略する事にては有べからざる
也。儉約の事能考_レる行_レ道事、学者心得べし」

三段

一、よろづにいみじくとも、色好まざらん男は

此段、大に難破する鈔有。俊成卿の「恋せずは人は情
のなからまし」、此歌よき引歌也。草庵集に初恋の初頭に、
入るよりもふみたがふらんあやしくもやがて恋路にま
よひぬる哉

十二因縁も無明の一念より起る心をあかす。遍照、慈鎮
を初、其外僧侶の恋歌をよむ事、ゆへ有事也。是則此道
のやさしきおもひ寄せ也。

此段、好色をす、むるとおもへるは大きに心得たがへ
る也。源氏物語も一向好色専一□書_に書たると見は、作者紫
女の心には相違すべき也。物語の前後、上中下諸人、心
に中り胸を冷すべき誤り所々にあり。好色めきたる様に
て内意はことごとく諫言也。俗に云真綿にて首をしむる
とも、亦切口に塩のしむと云に同かるべし。伊勢物語も
艶書と見は、作者伊勢の為にはめいわくなる事也。此両
物語のさかいに入らぬ輩は、此段はこゝろよくはすむま
じき也。

先づ心安き方に見は普門品の長者居士、童男童女のた
とへ、又は菩薩の四摂_キの方便に布施、愛語、利行、同事

の四つ、又禪語に与奪と云事は、あたへてうばふ也。其好所より本道へ誘引する也。甲陽軍鑑に信玄公詩を好み給ひて武道少懈り給ひし時、老臣信方詩を習得て心を君と同うして、後に諫めて信玄公詩作を止め給ふよし、かの書に委し。

一段の始終の文体を弁じ出す事、軽くおもふ事なかれ。一とせ、京四条の道場にて徒然種の講談有し所へふと

参りかゝりしに、殊に此段の所にてまことに弁舌聞事なりし。しかし一向艶文の事のみにて、本道の事は曾てきたなかりし。つれなる人も此道達人にて有しが、此事を聴て「兼師も是等の講談を聴給はゞ、さぞおかしきおもひ給はん」とて兩人つぶやき笑ひて帰りし也。講師能々おもふべし。はづかしき事也。

六段

一、我が身のやんごとなからんにも、まして数ならざらんにも

野槌には無後は不考（不考）の第一也と大にしかり、諸抄もさまゞ註を加へたり。此段は畢竟述懐の詞也。代々撰集に四季の部立、雑、述懐、無常、祝言、部立さまゞ也。

此草紙書あらはすところ、神祇有、釈教有、恋あり、無常は勿論也。其趣に對して見ば難なからんか。述懐の段云は、好き御子などおはしまして世の為人の鑑ともなり給んに、などやなからんとおほしてんや。さやうなる御子はまれゝゝにて、あしき事のみ有世なれば、なからんにはしかじと也。仏も初めて化嚴（化嚴）經を御説きなざるに、如響如啞とて、人の氣もとゝのほらず入滅もなされまほしく歎息ありしと也。孔子も我が道行れず、筏に乗て海に浮ばんとやらん仰られしと也。今時我人の愚痴にほとびたる述懐にはあらざるべし。

七段

一、「あだし野の」の下に、「四十（ヨソジ）にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ」

或人の曰、あまり是は兼師見過されやう哉。せめて五十にたらぬほどとも有べき所となげかれけるとぞ。北州の千年の齡も□の薪（薪）となり、樞花一日の榮も日影をまつにおもひをのぶる也。誠に古人百卷の書中にもおもひつかぬ所、古今未曾有の名文なるべし。かやうの所におもしろみをつく時分、此草紙は我ものになるべし。

八段

一、世の人の心まどはす事、色欲にはしかじ

九段

一、女は髪のめでたからんこそ

八段九段をひとつにむすびたる本多し。段をわかつ事、師説也。此段諸人江のいましめ、後段の百七段の所と心を合せ能考見るべし。是にて女色は興をさますべし。講談の時、念を入よく講ずべし。

十二段

一、おなじ心ならん人としめやかに物がたりして

此段、見ちがへ聞まがふ段也。「まめやかなる心の友には、はるかにへだゝる所の有ぬべきぞわびし」。畢竟心友にしく事あらじと落着する也。「心の友には」の「は」の字と、「へだゝるところの有ぬべきぞ」の「ぞ」の字につよくあたりて見るべし。

十三段

一、ひとり燈のもとに文をひろげて

兼師一生のなぐさみ此段にこもれり。かろくおもふべからず。此草紙一部の大むね也。

言の葉のうちをなくく尋ぬればむかしの人をあひ見
つる哉

此歌、新古今に出たり。此段長々ともあらず、しかも文
てい始終おもしろく能云叶へたり。講席の時、何程も長
く、舌弁おもしろく講ずべし。聴人氣を付、心をよする
段也。

十四段

一、和歌こそ猶おかしきものなれ

「猶」と云字、前段江もかゝる詞也。諸抄の中に、「歌の道のみにしへに」、此「歌の道」と云はあしく、「歌の道」はかはる事あるまじけれども、「歌のさま」はかはるべき物なれば、「道」にてはあるまじ、「歌のさま」にてあるべしとて、本文に有「歌の道」と有所を「さま」となをしたる抄有。賤学末学の者、古人をもどく事本意背けり。

末の世も此情のみかはらずと見し夢なくはよそに聞か
まし

西行

皆人の心の種もかはらねば今もむかしの和歌の浦浪同
西行もかく申をかれ、貫之卿も「青柳の糸たえず、松の
葉の散うせず」など有。しかれば和歌の道のみ難有事は
なけれども、兼好つらくと其代をおもひめぐらすに、
代もすゑに成、人の気生も乱れがはしく、末代不変の和
歌の道までもおとろへ行かど、こゝは西行の詞をも少し
どき歎息したる也。貫之卿の上代の「糸による」の歌と
新古今の「残る松さへ」の歌と、これかれ古へ今を引く
らべ、歌人のやさしこゝろばせを述たる段也。当時末の
学士の我事聞けと論じ難じたるにはあらざるべし。りく
つ利口にわたる段にてはなき也。表むきは如此述べ、裏

のこゝろは和国に生れし者は皆是神靈の末也。和歌は忝
じけなくも皆ことごとく神言也。此国の人として和歌の
道に志なくてはあらざるべし。和歌に志ふかき時は喜に
つならず憂にまげず、代々の盛衰を考へ身の分限を知り、
山海野辺里々見ぬもろこしまで心を通じ、大空の月、世界
の花、皆我ものと領する也。扱和歌を学には先達の掟に
したがひ古きをしたひ、猶又詠歌大概等にしたがふべし。

十九段

一、折ふしのうつりかはること物ごとにあはれなれ

世人此段を四季の段といへり。浅く見るべからず。長
頭丸は、源氏、伊勢物語などやうのもの書作れと仰ごと
ありとも、書かねらるべきいきほひとは見えすと、此段
は右の両物語にもならびて恥ざる段と、古へ今まの人詞
にも出やらず、舌をも動しがたきと也。春の気色、夏の
風情、四序毎日目前に有に、同あはれと云詞所々に出た
り。宗祇法師の書をかれたるもの、中に、「あはれ」と
云詞に三つの品あり。一つにはおもしろくゆかしき心、
一つにはかなしぶ心、一つにはあつばれなる心。参考に、
「あはれ」と云詞八つ有。退子が孟郊野を送る序に、鳴
の字三十九有がごとし」と。又、大成に、「こゝろ」と
云詞九つ有」と。僕が愚見には、「こそ」と云詞十六有。
師に此事を物語し侍ければ師笑つて、「かやうの事をせ

んさくせば何程かつくる事あるべからず、かつて益な事
也」と云に、僕袖を顔にして退く。此段、講訳別しては
なやかにすべき事肝要也。

二十四段

一、齋宮の野々宮におはしますありさまこそ

齋宮の事は源氏物語に委ければ、是になぞらへ御息所
と源氏の歌とりかはし給ふ所などこれこれ交え、勿論齋
宮の詔諸抄并師伝を考可講。

扱、次の十一社 伊勢加茂春日平野住吉三輪貴布

祢吉田大原野松尾梅宮

何も高神にて、土農工高天が下の氏子尊敬したてまつる
べき神達にておはしますぞとよ。此十一社の本記、諸抄
の中、文段抄の説よろし。其外社家の説、又師説にした
がふべし。猶又神道伝受の人に相對して正道節に講ずべ
し。自見杯は夢にも用べからず。扱此草紙に有る所の神
祇残る八社有。

鞍馬鞍の明神 京五条天神 石清水 加茂の岩本橋本齋宮

齋院 都て十九社也。

一とせ僕、廻国の時分、右十一社此八社の神靈地を残な
く拝み、広前なる小石を一つずつ拾い、古るきをしたふ
志を袖にし、たもとにとめて帰りし侍しに、或聖の僧
に物語し侍しかば、かの聖のもうされし、それは是其神々

の御靈ミタマにていまそがりければ、いとたうとき事にておはします。おごそかにたてまつる事にはあらじ。小社にも祝納めたまへ。聖もとも□□（竊目ツキ見エズ）□□□□。東濃関といひける近きあたりの山里、尊き律院（リツイン）の内に祝納たてまつる。則十九社大明神と号したてまつる。委はかの御寺に縁起有。奉詞の和歌など有。

二十七段

一、御国讓ミツリの節会おこなはれて

御国ゆずり、天子春宮江御位をゆずりましまし、院にならせ給ふ時節会也。是はめでたき御事にて有けれども、かぎりなふ心ほそくおもはれける。兼師隱逸の情をおもひ合すべし。始め有ものは必終有。生あれば必死有。喜あれば必愁有。善悪は車の両輪、幸不幸は手の裏表也。一天のあるじさへかくのごとく也、まして下々をやといふ事を、「かぎりなく心ほそけれ」と云わずかの詞の中にふくませたり。云はずして言外にあらはしたり。

劍、璽、内侍所 此三つは三種の神宝にておはしますと云事、諸抄あらはず通り也。其中に野槌、慰草等の説を用。宝劍の事は、禁秘抄に神代三つの劍あり。宝劍は寿永の乱に入レ海失す。今清涼殿の用「御劍」。神璽は是れ神代より不代、寿永にも何事なく帰洛す。内侍所も同無事にて帰京す。内侍所、昔は天子御座近く有けるを、垂

仁天皇の御時温明殿に移す。御守は官女也。白河院の御時、神鏡飛出欲（ス）上天（セキ）。其時御守の官女、唐衣の袖に受留てつ、がなし。村上之御時、天徳之焼亡に南殿の桜木に飛かゝる。小野の宮の大臣、狩衣の袖に請留たてまつる。長徳の焼亡にも損失なし。又、長久之焼亡に少納言経信卿、神鏡の唐櫃を出たてまつるに、火盛にして不叶。此時神鏡焼失し給ふらんとあやしむ。然ども光輝唐櫃の内外有、櫃更損焼せず。一条院の御時御神楽有。寿永の乱に西海に有事三年、後無事帰洛す。三ヶ夜の御神楽有、猶禁秘抄に委し。宝劍神璽の事、野槌、文段抄註にて講可然か。神鏡の事は諸抄委からねば、禁秘抄の正抄の上、師伝を交え如此別て書出す。講筵の為に然るべからん哉。宝劍神璽の事も諸抄一決せずして取まがひ侍れば、能弁えよく講ずべし。大概是文段抄の説可然か。猶口授可有也。前段の齋宮の段と此段は神事にて有程に、忌穢を恐れ謹て講ずべし。

二十八段

一、諒闇の年ばかりあはれなる事はあらじ
此書の内、三ヶの大事と云所、一ヶ条此段に有。秘説也。人々推量して色々と諸抄にのする所、甚不中。伝受の方にかせをくべき也。

三十八段

一、名利につかはれて、しづかなるいとまなく一生を暮

儒家よりは難じ、仏家よりは称美する段也。其外諸抄の説々論を上げ了簡する也。畢竟終りの句の「万事は皆非也」と云所、眼也。或は又「蟻のごとく集る」の段、「つれづれわぶる人は」の段、かれこれ引合せて講ずべし。

六十段

一、真乗院に盛親僧都とて、やんごとなき知者ありけり

此段、世の人芋喰の段と云。此所三ヶの秘説の一ヶ条也。伝受なくして弁がたし。猶末の段の建治弘安の所に委し。

六十四段

一、車の五つ緒は人によらず、程につけてきはむる

此「五つを」の事知れがたし。諸抄に五車といひ、五緒車といひ、御所車といふなど説々を上げたり。此五つ緒の事、有職の秘事也。其道その家の人に可聞。惣じて此次下二、三段、皆有職の事を云也。

六十六段

一、岡本の関白殿、盛なる紅梅の枝に鳥一双をそへて

此段、鳥柴トシバの古実也。たもん柴と云もの也。鷹野より鷹のとりたるを、鳥を柴に結付て遣す礼也。たもん柴を今山家のものは「たも柴」と云。能見知れる柴也。伊勢流、

小笠原流礼者家に有。尋べし。

八十三段

一、竹林院の入道左大臣殿、太政大臣にাগরি給はん

此段、諸道つ、しむき教也。君たる人、臣たる人、誠に隱徳をおもふべし。「元龍の悔」、「元」は高き也。此卦は進む事を知て退事を不_レ知、得るを知て失う事を不知。月満ては欠け、物盛にしては衰也。沙石集に、真言宗は高野大師の時に、はやおとろへたりと云事考べし。徳をつ、しむ、諸道根元也。

九十三段

一、牛を売人有。買人、あす其あたひをやりて牛をとらん

と云

此段、心得たがふ段也。前段の弓を習事に付て一刹那も油断せまじき教也。今月今日に再びあひがたき光陰を、うか／＼とまぎれ暮す誤りを云也。

九十七段

一、そのものにつきて其ものをつゐやしそこなふ事、数をしらずあり

此段、野槌には大に難破したり。尤也。此段は賢愚得失の境を離れ、高き段也。黄檗の母の河水におほれしをかへり見ず、臨齋リンサイの一代仏の経説は不浄をのごふ古紙といはれし類也。野槌の評、誠に儒家より此段はそのま、

見のがしにはならぬ筈也。難破する所、兼師無よろこび給ふべし。徒然の好士、此事を諍う心は却て下かるべし。儒は儒と見、仏は仏と、是則、信也。是則、兼師のこゝろ也。是則、此草紙の大意也。

百段

一、久我の相国、殿上にて水をめしけるに

此段、曲りの事につきて諸抄の論一決しがたし。貞徳抄に、「畢竟只水を呑む器と心得たる、相違あるべからず。曲りの正体せんぎにおよばざる所」と。此註おもしろし。此段は久我相国、儉約にておごりなく無造作なる生得を称美する也。土佐日記に、「山崎の小櫃の絵も、まがりのおほちのかたも、かはらざりけり」と有。上代の貫之代にも用来る事、古るき器物と見えたり。此曲り之一器、冷泉家より道柯へ伝へつかはされ、僕が草庵に残る。

百一段

一、或人、任大臣の節会の内弁を勤られけるに

此段、六位外記康綱が才覚有し物語也。此次の段に衛士の又五郎が公事に能なれたる物語と、ならべて書出せるか。「外記康綱」と有るを「内記康綱」と書誤れる鈔有。まへに「内記の持たる宣命をとらずして」と云にかけて、内記も外記も同人かとおもひ誤れるなるべし。内弁と云は式事也。内記は唐名柱下、大内記、少内記有り。外記は

唐名外史、大外記、少外記有。内記、外記何も文筆の事司どれども、内記と外記とは差別有事也。職原に立入らずば知がたし。道の不案内の事は古人にまかせ、私を加ふまじき也。

百四段

一、あれたる宿の人目なきに、女のはゝかる頃有頃にて、つれづれともりゐたるを

やさしき段也。次の段に「北の家かけに消残たる雪の」と云おもかけ同意也。いづれもすみやすき段也。尤作物語とぞ聞こゆ。「春の暮つかた」の段、「長月廿日の頃」、「あやしの竹の編戸」の段、此段ともに艶にやさしく風流を述たり。源氏、枕双紙の佛をうつせし也。此次下の高野の証空、馬に乗たる女に行合て無一物の口論、山寺そだちの僧の意地、又女の物云かけたる返事をほどよくする男はありがたき物と云段、人々常にたしなむべき教也。何もかけくらべて見るべし。

百十七段

一、友とするにわるき物七つ有

此段、心を付べし。人々心得に成べき也。古人、此段に別て心入る、学者おもふべし。

百二十一段

一、やしなひかう物には 百二十二段人の才能は 百廿八段雅

房大納言 百廿九段 顔回は人に

右段々は皆、大仁心より出たる也。上たる人、下を恵むに此段の心を用いば、一国の主は一国治り、一郡の主は一郡治り、一村の主は一村治り、一家の主は一家治まるべし。深思、明に弁を見れば落涙すべき段也。講筵軽々講ずべからず。

百三十段

一、物にあらそはず、己をまけて人にしたがひ

此段、学問すべき心得に成べき也。学と云は道の第一なるものなれども、大方人を見下し我慢増長する物也。必とする事なく我なしの学文なれば、我慢せまじき為の学文にてこそあれ、百千の書を諳たりとも此心得うすくは、浮べる雲なるべし。

(百三十二段)

一、鳥羽の作道は鳥羽どの立られて後の名にはあらず

此段、世の人云なれたる詞に相違有事を云は常の事也。「田鶴の大臣どの、鶴を飼給ふゆへの名にはあらず」と云になぞらへて見るべし。扱又、「元良親王の元日の参賀の声、鳥羽の作道まで聞たり」と云事につきて、又太郎忠常が宇治川先陣して、名乗りし声が都まで聞えけると云事、かれこれ諸抄に引用てふしんある段也。師伝なくしてすみがたき段と心得べし。

古例に用る徒然種上下式巻也。是より上を上巻、是より下を下巻と定む。

百三十九段(百三十七段)

一、花は盛に、月はくまなきをのみ見るものかは

古人の評并諸抄、何も古今未曾有の文にてあるべしとして、世こそつて称美したる段也。文の大意、風流に云流して下心は無常を觀じたり。「月はくまなきをのみ、此の「み」と云一字、眼也。花は満々と盛の時、ことごとく色香をしたふ。月は一天に雲なく千里の外まで晴明なるを、古人みなく用來を、兼師独り打代て心を付たる所、徹書記物語に、かくのごとおもふ物は、歌人詩人多しといへども兼師老人にて有べしと也。顕輔卿の「秋風にたなびく雲のたえまよりもれ出る月」と詠じ、家隆卿の「おもひつゞけて見る時は散こそ花の盛なれ」と詠じ、西行の「中々に折々雲のかゝるこそ月をもてなす」と詠じ給ひける、これかれ両三首の歌うち吟じて合感すべき也。歌人にあらずは弁がたかるべし。其外に「男女の情も相見る斗をばいふものかは」、又の祭の所にては、「忍びてよする車共の、それかかれかとおもひよすれば」といひし風情、終りには人間のありさま常なき事わりを述べ、

始より終に至まで耳目をおどろかされたる、兼師一生文の骨肉、花とも実とも云べし。講筵の時にかに安らかに情をこめ、はたたのもしく、果ては常なきことほりをいとしみふくと、みづからも泪を浮べ、人をもなかせ申べき段也。講師よく心得べし。

百四十二段

一、されば盗人をいましめ、ひが事をのみ罪せんよりは

此段は、上に云所の「やしなひかうものには」、「顔回
は人に勞をほどこさじ」と云段になぞらへて講ずべし。
此書は隱者の風流に世をおかしく、又壯老の心ばへを述
し斗にてはあらじ。治国の政、人の仁心、日用勤べき難
有教、兼師天下之權をとらばいかばかりにかあらん。

百五十三段

一、為兼大納言入道めしとられて

此段より前後二、三段は、資朝卿才学ありし事を書た
り。是又人の手本となる也。此中に用不用の用捨あり。

百五十五段

一、世に随ん人は機嫌を知るべき也

此段、万事に渡べし。和国にて二宗の祖師達、宗旨建立、
此機嫌の二字を考給ふにや。人に相對するにも、上江奉
公、又下を召仕うにも、皆機嫌の二つの中は出まじき也。
兼好、師直にたのまれし艶書の事も、時宜と機嫌を知る

ゆへなるべし。しかし臨産臨終ばかり時節機嫌をまたぬ、
例の常無き断也。

百五十六段

一、大臣の大饗はさるべき所を申うけておこなふ

此大饗の事、伝受なくして知がたし。三ヶ条の秘事の
外に伝受有と云、此段也。

百七十一段

一、目をおほふに人の手まへなるををきて

本立道成るの心也。手まへの地形を堅固にして、外を
もとむる事は諸道皆一つ也。本をつゝしむべき教也。清
献公が詞と禹王の三苗を征し給ふ時、軍をかへし徳をし
き給ふ事も手前を正しく、仁徳を施し給ふゆへ也。此詞
此段の眼也。或抄に此段、儒にて儒にあらざと論を上げ
たり。とかく他を求めめずとも脚下によく氣を付けよと
のいましめ也。儒仏のせんぎにあらず。講師能弁ずべし。

百七十二段

一、若時は血氣うちにあまりて

諸人江対しての金言也。若き時、家人の身の上覚悟す
べき教也。大津の三之は「此一段は書きぬきて、若き者
どもの守にせさすべきものなれ」と申されけるよし。君
たる人、血氣にはやつて先祖の家風をもどき、又忠臣老
臣の諫言を不用、臣たる人、血氣につのりて上を軽んじ

下を恵まず、万人のなげきとなる。貞実なきにはあらねども、若き時の血気のいたすあやまち也。義貞黒丸にて不慮の打死も、盛遠が邪色も、皆是若き時血氣にあまる誤り也。

百七十三段

一、小野小町が事はきはめてさだかならず

諸抄に色々と了簡を付たり。博学の古人さだかならぬとあるからは、其通に住せをくにさはる事あるまじ。人丸、赤人、黒主、猿丸、小町等はすぐれたる歌仙、出生取沙汰に及ざると或人申されし。是歌道の教なるよし。

百七十五段

一、世には心得ぬ事の多きなり

酒の失有事をさま／＼といましめたり。折にふれては拾がたく一座の興となる事を、風情おかしく云叶たり。上戸の酔狂のありさま、下戸のいたみながら呑みたる体、此段講談の仕方思慮すべき也。細かに心を付べし。歌に、酒はまたのまねばすまの浦さびし過せばあかし波風ぞ立

其代に今の多葉粉などあるならば、兼師はいかゞ申さるべき。

水戸黄門公、三つ組の御盃、御物数奇のまきゑに、

第一の小盃に人呑酒、第二の中盃に酒呑酒、第三の

大盃に酒呑人。

百八十二段

一、ふれ／＼こゆき、たんばの粉雪といふ事

此段、又前段の「馬のきつりやう」の事、諸抄にさまざまの義理をつけ、評を上げて細註を加へたり。甚不用。畢竟童男童女の口ずさみ也。ふかくせんさくをとぐまじき也。

百九十段

一、妻と云物こそおの子の持まじきものなれ

後段の「しのぶの浦」の段と相当すべき段なるべし。心もやさしくあはれもふかく、源氏物語の倂、歌に心有人は多情をもよすべし。人の上品の程よきは理の至極也。只物事似はず、ほどよからぬを云也。五十八段の「道心あらば」、七十二段の「家の内に子孫の多き」、九十七段の「其ものに付て」、百五十一段の「年五十に成まで」、百八十九段の「不定と心得ぬるのみ」、此段の「妻といふ物こそ」、以上六ヶ所、野槌に難破する所也。人の上にて、教誡、鏡となる人は、其事に付、其席に望、其時によりてしめし教る也。達磨の無功德といひ、不識と答へ給ふも、其場により先の器の大小によつてしめす也。一がい論ずべからず。かやうの所、講談に心得有べし。一段も二段も上を述べし。

九十八段(百九十八段)

一、揚名の助にかぎらず、揚名の目と云物もあり

揚名の助は、源氏夕顔の巻にあり。源氏三ヶテ大事の一つ也。葬の巻に「三つが一つ」、神の巻に「どのあもの、ふくろ」、扱此「揚名助」、都て三つ也。或抄に職原抄を引て、衛府、諸司、諸国何れにも、かみ、すけ、ぜう、さくはんとて四分配当あり。文字も替る也。揚名介、目は、諸国の守、助、丞、目の四方にてある程に、揚名助は諸国受領の替名にて有べき也と。源氏物語の或秘抄に、揚名の関白と云事出たり。然ば諸国受領の替名と云も不中也。此両議は職原に余程立入らねばすまぬ事也。職原不案内の方は此評論どもに及ざる事也。揚名助は源氏物語の秘事にて、伝受なくてはしれがたき事也。伝受に任をく事、此上の習也。

二百二段

一、十月を神無月といひて神事には、かるべきよし

諸抄説々多して一決しがたし。或吉田家の神学者の云、神書に曾て無之事也。七夕の事も説々多くして、本説たしかならず。しかし七夕、神無月ともに久しく和歌にもよみ来れば、其国風にまかせすべき也。本説なき事も、はからずして大内のならはしともなる事、前段の御産の時、こしきをとす事など思合べし。

二百十段

一、喚子鳥は春の物なりとばかりいひて

寿抄によぶこどりの事、「古今集三鳥の一つ也。伝受なくては知がたし」。諸抄色々せんぎあれども、一つとして不中也。伝受の方に任すべき也。

二百十一段

一、万の事は頼むべからず

諸人上中下に至まで旨とすべき也。此段のごとくにさへ心得たらむ、心身ともに安かるべし。儒仏神の三教も其外は出まじき也。野槌にも大いに称美したり。

二百十二段

一、秋の月はかぎりなくめでたきもの也

野槌に古事を引て長々と註したり。寿抄には、時節相応の折をおもふべしと有。月は陰にして水也。秋は金気也。金生水にて月清明。「月はいつもかくこそあれとおもふは無下の事也」と云所に、光陰をおしむことはりを言外にあらはしたり。此秋は金気、月性水にて、時節相応の時、一年三百六十日の一月也。又云は十五夜一夜也。此時に二度逢がたき事をおもふべし。

二百十七段

一、或大福長者の日記

はじめに大福長者が金持用心をよきやうに書なして、

次^キにて難疽を病む者に対してたとへを引て、畢竟金持ももたぬ貧者もひとつことはりを述たり。理即究竟のたとへおもしろく云まわしたり。「理即より究竟に至仏こそひとつ心の玉と見るらん」。兼好家集に有。高野山に兼好自筆の短冊有。講談、抄の通誤るべからず。

二百十九段

一、四条黄門命ぜられて

龍秋、景茂何も楽人も。兩人の了簡次第有事を述る。此理万事に心得有べき也。物事に其上く有て限りなき理をあかす也。学問芸能によらず、上手の上に名人あり。了簡の上に又用捨あり。世にはしり、知恵なる人は一片に心得てあやまち多き也。惣じて此書のならはしに、初にはむる様に後に云をとし、始に一理を能上げて後に其上の理を云。所々に出たり。講師心を付べし。「後徳大寺の寢殿に薦みさじとて」、「鎌倉の中書王」、「或御所持」、「御前の火爐」、「東大寺の神輿」、「大福長者」、「四条黄門」、都て七ヶ所、人々の鏡と成る段々、理の上に有る事を云也。

二百廿一段

一、建治弘安の頃は、まつりの日の放免のつけものとして

此書の三ヶの伝受の一つ也。伝受なくして知りがたし。此伝受の事、家々の了簡学者の見様、品々上げて数へが

たし。或抄に、兼好もとより古今の隠士、此書とても書捨なれば、伝受切紙いさ、かなき事也。又の説には、「白うるり」は顔の色白々として、物にうつかりとしたる者をさして云。「うつかり」にて有べきを、「か」と「る」の文字の誤りなり。「つ」文字を略してつかう時、「あつぱれ」を「あはれ」と云、「もつて」を「もて」といひ、「さつぱり」を「さはり」、「うつかり」を「うかり」といふ、此類の略言也。又説に、「白うるり」は「る」を捨て聞時は「白うり」也。此人は白瓜に似たる顔にて有ゆへに、かくは云也と。

「放免のつけ物」は、神代の軍立也。東妻鏡に出たる放免は、沓を持つ役人也。又「ぬのもかう」は幕に「もかう」と云物添置く。御簾などにも有物也。又異説に、此三ヶの大事と云事は、元なき事を松永貞徳所意也と云。皆是一つも不中。

師説に、此書の作者、古今独歩の隠士、身自伝受口決を残されずと云事、勿論云に不及事也。古今和歌集三鳥、源氏物語の三ヶ秘事、貫之卿、紫女のの給ひ残給ざる事勿論也。後の人、道を上げ用んが為なるべし。此徒然種、兼好死後数百年を過て世に出来す。時の人もてあつかひ、堂上地下、田舎の果奥松嶋までも流行、諸家用る事、文明年中宗祇の在世より始め、別しては慶長歳より盛也。

此書に抄を始めて求め出されたる寿命院法眼、医家の寸隙をうかゞひつゞり出され、則奥の御添書は中院也足軒の御筆作、軽からざる事を知るべし。其後林道春、野槌と云鈔を作て世に流布す。又踏雪抄出て猶あまねく人知所也。講談を初めて仕出されたるは、松永貞徳也。秘事口授と云事は、此書の旨深く信恐すべきが為か。

古今和歌集の三鳥、所々の伝受有げに候事、たとへ申も恐れ有。其外源氏に三ヶの秘事所々の口授、伊勢物語の口授、百人一首五歌の秘、和歌五儀三体、詠歌大概抄の口授、上げて教へがたし。然るに先達先賢の書に、貞徳自一人として伝受切紙をいたさるべきや。此書は世人教誡の元にも成べき事なればとて、伝受口授をも残さまほしきとて中院也足軒、烏丸光広卿、長頭丸へ仰下されし事の起り也。軽くおもふべからず。此書の秘事は貞徳家を出ざる事明か也。

二百廿二段

一、竹谷の乗願坊、東二条院へまいられたりけるに

此段、無我の理をよくいひて諸人の手本とする也。別して学者の上にて心得有べき所、講談の仕方にて人々徳を得べき也。

二百卅六段

一、ぬし有家にはすゞるなるものみだり入くる事なし

心法を論ずる也。此段、主人公を立て見れば、見まがひ侍る也。鏡に色形なく虚空の万物よく入るゝの類、心と云者元来無きと見る也。主人公の上を云。神秀の語は勤め、六祖の語は勤めを離れし上を云。然ば神秀は語はあしく、六祖の語はすぐれたると云にはあらず。只うの毛一筋の違也。主人公を立てると立ぬも是又わずかの違也。此段はとりまがひ、講釈も仕にくき段也。講師心得べき也。

二百卅九段(二百三十八段)

一、御隨身近友が自讃とて七ヶ条書とゞめたる事有

此近友が系図、知がたしと諸抄趣一同也。僕、一とせ堂上方に居て古書有べき所々尋求めしに、近友が自讃の書も系図も不詳也。兼師時代の人にや、覚束なし。

世人「自讃の段」とてあまねく知所也。諸抄の説一決せず、三ヶ条の外にも、口授有と云は此段などの事也。「鳥羽の作道」、「大臣大饗」、「車の五つ緒」、「八つに成し年」、是皆口授有段也。扱此書の大半は、人を先にして我を後に居べき教へなるに、自讃と云事、相違したる事也。又自讃歌とて後鳥羽院を巻頭にをきて、俊成卿をはじめ其代の歌仙達を集たる一書あり。しかれば自讃歌といふ事も有にや。耳底記には自讃といふ事、世に用る事なれど曾てなき事也。諸抄一決せざるも尤也。又小町の歌とて、

我なくば弥陀も正覚よもとらじ我にてみだの知識なり
けり

此歌をも自讃歌に出せり。此歌本説たしかならずと学者
説也。されば伝受の趣にまかせをくが此書の習也。

百四十一段(二百四十段)

一、しのぶの浦のあまの見るめも所せく

此段、打聞には好色をす、むるやうに覚えて見誤る也。

若時は血気につのりて無^情無情事も多かるものなれば、
色をも香をもくみわけて情をも成べき事也。是則仁心也。

扱、老法師、不幸の身、不具なる人、病身などの身は、
我をかへり見、色好みはせまじき也。万事をくみわけ手
まへをつ、しむこそ、色をも香をも知るとは云べけれど
也。前段の「妻といふものこそおのこの持まじき」と云
段に引くらべて可講。「梅の花香しき世の朧月に立ずみ
たる」と云所、源氏の君の朧月夜の月待に殿中にて御逢
なされし所など引合、おもしろく講ずべし。功者と用捨
と分別とあるべき段也。風情高く、講筵別して心得有べ
き段也。

百四十四段(二百四十三段)

一、八つに成し年父に問て曰

此書の終の段、殊更に口授の段也。双紙一部の終りな
れば、講師尤心得べき也。初段終の段に、一部の大意す

むものなれば、別て入念かるくおもふ事なけれ。野槌に
引所、三身寿量無辺経に、仏と文殊と問答、此所に引用
て能き也。経の文句、文段抄にも出たり。文句空覚程に
なければ、講筵不出来也。大成に引用る、中庸の「天上
無^レ声^ヲ無^レ香^ヲ至^レ哉」。礼記の間喪編に「礼^ハ非^レ從^レ天降^ル、非
從^レ地出^ル」、是皆引用てよし。師伝には、心誠上人の歌を
用られたり。

草の葉にむすばぬさきの白露はなにを便りにをきはじ
めけむ

此書のはじめに「よしなし事を書く」というより一部
の書中、皆空言也。又空言かとおもへば、今日の日用、「古
への聖の御代政」と云より、神祇あり、有職有、無常あ
り、恋あり、述懐有。今日講席の上に空言壺つもなき也。
一座終りて後、講師、発起人、我々の住家へ帰る跡即空
座と成る、よしなし事也。此書は講談の仕方にて高き位
に至り、仕方にて下きにも聞ゆる也。浅々しからず信を
元とする。講師の器も大小、此席に及なれば恥しき事也。
よく^レ志慮^スすべし。

右鈔の意趣并懐旧詞

やつがれ廿年の頃ほひより、はからざるに徒然種の心
を心によする事年あり。しかはあれど、武蔵野の草の葉

しげかりける勤のひまなぐさむ月の、くまなき夜にもあはざりけり。宝永酉の春、四十に二つ三つたらず老のはじめもちかかりける年より、老たる母の病につきて、彼地を辞してみの、お山の禁なる古郷へかへる。兄は洛の味岡氏の医門下なりければ、兄に随しばらく医に隠れて、老しげれるは、きぎの杖代ともなれるひまなくにも、かの草紙の意地より他事なかりけり。

享保二む月の初め、は、木々も淡雪の下に消かへらぬ涙に、不幸の事ども打かさなりければ、かなしびの泪、おもひの袖、いかほしあへぬべき日とてもあらざりけり。秋風のさそふにおどろく心より故郷を出て、都、正法山の門中にいにし年より、よしみありける或御寺に入て、朝な夕のあかの水、夕々の香花、ほきゑきさやうといひける有がたき御仏の御言葉もならひ覚て、日ごとにおこたりなく勤侍りき。現当の院主嵩大和の隠閑居、什大禅師は世に名高く聞えましましけるが、僕が徒然種をよみ覚え、他事なき多年の志を感じおほして、一洛の宮川道柯居士は禅師の風雅の旧知音なり。夫れ徒然種は貞徳家の書にして、其居士貞徳の高門、大内までも聴へある目出度敷嶋の道案内者也。此人にこそ逢せたけれ」とて、いともねもごころに仰やり給ひける。

道柯居士、其時は八十にあまれる五つの年なんなりけ

れば、大方人に交りをもしたまはざりけるが、禅師とは久年のちなみ、そのもとよりの人ならば他ならずとて、初じめてあひに相生の松もげにいと堅かりける温潤の顔色心よげに、かの草紙の来由聞もふかしぎふしぎの因縁なるべし。いかなれば今年今日、僕が年頃おもひあまれる冬籠りたる梅が香も、ことしの春に咲あへる句も時に出あへるにや、此時「什大禅師九十、松堅八十五、僕四十七」是より月毎日毎に通ひて、此書の本意をも奥儀をも残なく請継侍し。其明けの年は、享保三文月末の五日、終に一巻の書を許し下し給りぬ。まことに黄石公が子房にあたへし玉ものも是にはよも似まじかは。それより三年過む月の末の六日、什禅師、行年九十三歳にて鶴林の雲にかくれ給ひぬ。是は此れ僕が法の師也。和歌の道教までしたまひける、ひとかたならぬ恩徳のふかき事、千尋の海も浅かるべし。

扱、或徒然なる日、道柯居士、歌物語の序にのたまひ出し給ひけるは、「此徒然種は多年の見功ゆへに、其奥儀を伝たるも安かりけるが、歌といふものをもよみてこそ、此書の旨にも叶侍らん。歌をよみ習侍れかし」とて、和歌の道相続の門人、内海顕礼子へ引合せられて、月次の兼題、又当座の題、僕が拙き文字をならべて、会席の人々の笑種をつむたねとはなりぬ。「年五十に成まで至

らざる事は捨つべかりけり」と聞へしにも、わぬしは二つ三つこそ若かりけれ」と、僕が老学を老師□給けり〔此時序高畝が古事など咄あり〕。かの玉津嶋の姫神もおかしとこそ、その住吉の神もあはれとやおぼしてんも有がたけれ。僕が浅く拙き心から、いともかしこきはかりもなく敷嶋の道のはしぐ中々およびがたかりけり。しかはあれど師の詞もだしがたく、一つは恩謝のため、二つは秋津洲の波間に浮出にし人の数にもと、いまさら月次の会毎に、都の空、花の最中へひなびたる言の葉のみおくりつかはしぬ。

田舎わたらひし侍し、はるけき道の露わけて、此草紙の好士所々の発起、講筵のあふささるさかたのごとくせし事あまたたび、京なる老師翁のもとへいひ遣しけるに、老のよろこびある文どもおくり給りぬ。僕が壮歳の時より半百ちかきまで、十年あまりを経て、徒然種の諸抄を考え一抄となしたる一書を、老師翁の披見に入侍しに、師の曰、「古来より此書に抄をいたすの多き事、東西に走る蟻のごとし。しかし皆他をなぢり、自見を専とする、是作者の病也。もとより草紙の本意にもあらざるべし。予むかしより此書をよむ事数百べん、終に鈔を作らず。書中文の大概、詞、古実、古事、ことごとく寿抄を初め、野槌、慰草、踏雪抄等に委し。其外の諸抄、只論を事と

する斗なり。予、若かりし時、高辻亜相公江參上せし折ふし、一老僧と此草紙の事につきて一言二言論ずる事ありし〔此一事は道柯居士行状に出る〕。それさへ此書の奥儀を失ひけるよと、講筵の度に若かりし時の悔いを述し也。必、抄作る事なかれ。書なきにはしかず」と。此草紙二百四十余段の内、一段なりとも自も理とし、他もしめす事こそ、此書の信たるべけれ」と。此金言、僕が肌骨に硏して十年あまり勞考せし書鈔、皆尽反古となし侍りぬ。其後人の為、身の為に全すべき所、五所六所書抜きもて、重て老師翁の机上下にさしをくに、破顔微笑して「是こそひとへに利口を離れ為人專にして、未々此草紙の軽からざる事を世人知らんか」。

時いかなれば享保十丙午きさらぎ後の三ヶ月、老師行年九十五歳、眠がごとく西山の端にかたぶくかげと消給ひぬ〔臨終辭世の和歌、門人の挽歌、国々所々のいたみ、七々中陰の追悼、此道相統の門下、京都顯札子家に有。今は内海松徑と号す。先師より続来、月次和歌の会、松徑判爾今不絶。是先師之余徳也〕。札子よりいそぎを告る文、見るにおどろく。先師終焉のあらまし聞に立出、旅衣袖にもあまる余寒の霜、朝けの風のさむ空かけて、ひへの山、湖水もいさや白雲の、都堀川なる先師旧庵の柱に向て只泣く。

卯月十二日は先師七七の日数に中る。頭糺子をはじめて孝甫、道堅、閑寿、松貞、良斎、白龍、桃州、清長、元喜、其外門人数あまた、僕も人数にて鳥部野の塚の下に踞カッペンに、石上も只人々の袖の泪にくちぬべし。折ふし郭公一声二声聞へければ、

くらべなん我もおもひのねをのみぞなく鳥部野の山時鳥

師の半徳のその千一徳をも請統キツ侍しにや。僕が拙き講筵をしたひ望めるともがら、かのもこのもに出来て、かいやり捨つべき此一抄も、人々乞うるにいなびがたく、うつしもてつかはしぬ。愚なる人は見安かるべし。賢き人の為にはあらざるべし。

濃州不破中山竺

享保十三申孟春吉旦

春雷堂迂菴謹而述之

講筵可心得次第

一、此草紙発起有り可講。上下一部三十五座、四十座、或は五十座、又上巻は春、下巻は秋の事など有り。或は月次式日興行、常の事也。発起頭の器に応じて、講ずるに細疎あり。一同に致べからず。惣而講談一片に覺、判形のごとくするは、初心の至也。其座に望、時節を考べし。

是則、講師働き也。

一、貴人召て講談之時は一座切、二座切なるべし。謹敬を本とすべし。尤、初段より二段めに至るべし。「あだしの」の段、其外無常いまくしき段は用捨すべし。「家居のつきぐしき」、「くするの」、「段、「独灯のもと」、「和歌こそ猶おかしき」、四季の段、「岡本の関白」、「竹林院の入道」、「やしなひかふ」、「雅房大納言」、「顔回」の段、「物にあらそはず」、「為兼大納言」の段より、次下「資朝卿」の物語、「貝をおほふ」、「若き時は」、「万の事は頼むべからず」、「秋の月」等也。それも上より御望の段有には其意に随べし。然ども其家につき禁忌の事有べきを用捨すべき事也。

むかしく九条様にて女房達のなぐさみ望とて、貞徳翁、此草紙を夜分に講られ侍しに、「万の事は月見るにこそ」の段を御望ありしに、その次下キへ行て、「おとろへたるすゑの代といへど」、いふ所有を、「おとろへぬすゑの代」とよまれけるとや。上江対しての働きなるべし。是等の事をおもへば、講師たるものは其席くによりて心得有べき也。大内のさたなど別而心得有べし。しかし発起有て一部を始終講ぜんには、その用捨有べからず。本文、註の通り明かに可講。

一、一座切望ありとも、三ヶの大事、六ヶの口授并「喚子鳥」、

「神無月」、「小野の小町」、「揚名介」等の段は講ずまじき也。

一、僧侶、折ふしにつきて望まれ可講は、「後の世の事心に忘ず」、「我身のやんごとなく」也。「その物につきて」、「一言芳談」、「或人法然上人に」、「竹谷乘願坊」、「山寺にかきこもりて」、其外は望にまかすべし。自讃の段、「八つ成し年」の段、世間通用人の望有段也。口授の段といへども、此二段は望あらば可講。是又大事の段也。軽く講ずべからず。

一座切の講談、夜会などは、高音声用捨すべし。成程しづかなるべし。古事義理をつよく云詰る時は、弁も長くなるもの也。饗応の後など、兼而の心持ふたしなみなければ、講談出来なるべし。惣而、一座切の座敷講談はむつかしき物也。

一、尼公、女房などの望にて講庭の時は、初段より四、五段もつゞく。是もあまりけやく色めきたる段、又いまくしき段、遠慮すべし。段も長きは無用、長座は不興也。短、今少と残多き程に講ずべし。一座切、二座切、饗応の席などにて望まる、折ふし、成程短座しかるべし。

一、本文より註に至まで、とくと心腹に畳込まねば、講訳不達者也。本文さへもおどろくしく皆註に預け、講談一通りを書抜き、他へ預けもの、ごとくして講訳する人、

当時多き事也。甚あぶなく薄氷を踏こ、ちせらる、也。本文は勿論、註も義理も又自見一段くツラシにせんさくし、我心中に諳、心にさへ納置時は、弁はおのづから能まわる物也。常に云咄も、始終を心によく覚ゆる時は咄も出来、聞にも聞能き也。

大津の三之に道柯居士、万葉の講談を聴れけるに、大方空にて講ぜられしと也。僕が一年、道柯居士に伊勢物語をあそここ、聴侍るに、是も多くは空にて申されける。居士、時は八十五歳也。当時禪家長老衆中にも男山、清見が関などの老和尚は、本文のま、註なしに講じ給ふよし。歌書には限るべからず。何れの学者の上に空覚程になくは、講談はせまじきもの也。

右六ヶ条者、講師たしなむべき用要也。軽おもふ事なかれ。他見堅禁之。

春雷堂迂菴拜書す

此一巻は西濃不破郡荒川の隠士安田氏以中迂庵師伝にみづからの意趣をくはへて書せる要集也。年比和歌の心友浅からざれば、受持せらる、三ヶの大事、切紙などのこりなく予に授与し給ふこと、いにし享保第十三申の春なりけらし。生前の大幸これのみとやいふべからん。とみ

に筆とりて書写せましなどいひければ、老後の形見にも
など師伝抄并講筵要集等此たび染筆して贈り給ひぬ。い
さ、かも他見を憚るの要集なれば、信有べき後人をまつ
のみ。

とにかくに玉の声ある言の葉や

手にとるからにひかりそふらん

于時元文元年辰の仲夏日

〔謝辞〕「徒然種講筵要集」の翻字を許可くださった松井屋酒造資料

館の酒向嘉彦氏、本書の存在を御教示くださり、種々ご高配を
賜った神作研一氏に心より感謝致します。

また本稿の原稿作成には熊本県立大学大学院生の柿本加奈君・
竹嶋麻衣君の協力を仰いだ。併せてお礼申し上げます。

*本稿は平成十九年度科学研究費補助金（若手研究B）による
研究成果の一部である。

乗陽斎平井冬音

印
冬音（乗陽斎）